

<大賞 1団体>

- 特定非営利活動法人 ダウン症ファミリー総合支援めばえ21 (大阪) / 50万円
 好きから始める食育 ～生きる糧を育むために～

<p>団体概要</p>	<p>ダウン症児及びその親に対して生涯にわたる支援を行うことにより、ダウン症児が幸せな人生を送れることをめざし、もって、親がダウン症児の将来に対して安心を得られることを目的に2014年に設立した団体。当団体の職員はダウン症児の母親が中心で、保育園の調理師として栄養管理や食育に携わってきている。</p> <p>主な活動としては、ダウン症児への療育・余暇活動支援、親への情報提供・精神的フォロー、啓発イベント、放課後等デイサービス事業などを行っている。</p>
<p>事業概要</p>	<p>これまでの活動の中で、ダウン症児に対するさまざまな悩み（摂食や肥満防止、心臓病などを持つ子の健康維持メニュー、家族での外食の機会が持てないことなど）を経験してきた。</p> <p>本事業では、これらの悩みに対して、ご家族と一緒に食べる楽しみ・食べることにまつわる知識や経験を深めながら健やかな心身を育てることを目的に、医療や食のプロ、地域や生産家の力を借りながら「ダウン症の子どものための食育」の企画として、毎月実施するプログラムを内容としている。</p> <p>具体的には、ダウン症の子どもたち向けに食をアレンジするための勉強会・実習、歯科医による摂食の講義、絵本の中の食べ物づくり、兄弟姉妹と一緒に楽しむ夏祭りやクリスマス会、月見だんごや七草がゆを通した日本文化の体験、内科医を招いた内疾患のある子供向けの食事アドバイスなど。通年事業としては、「食育便り」の新聞発行や「ダウン症の子どもに役立つ食のコラム」の作成を行うとしている。</p>
<p>講評</p>	<p>当事業は、ダウン症児やその家族が抱える食に関するさまざまな悩みを、本人とご家族と一緒に楽しみながら解決をめざすための事業である。楽しさと学びが上手くプログラムされており、医療や食のプロを講師やアドバイザーを招くなど専門性も高い。審査委員会では、当事業が取り組む課題はダウン症児とその家族にとって、深刻度は高く、食を通したいろんなアプローチによる企画事業について、「創意工夫」や「社会性」「効果と発展性」を高く評価した。</p> <p>本アワードの助成が、これからの事業の発展の可能性として、ダウン症児・者に有益な食事介護や調理の工夫、発達の特徴に沿った栄養管理やメニュー改善につながることを大いに期待したい。</p>

<優秀賞 2団体>

■ 特定非営利活動法人 しぶたね (大阪) / 30万円

シブリングデー(きょうだいの日)コースター10,000枚キャンペーン

<p>団体概要</p>	<p>大きな小児病棟では、感染予防のため中学生以下の子どもは病棟に入ることが許されず、親が入院児に面会する数時間、扉の前で幼いきょうだいたちが泣きながら親を待つ状況があり、米国で広く行われているきょうだいのためのワークショップを日本で行うことを目的に挙げ、2003年に設立、2016年にNPO法人となった。</p> <p>主な活動としては、年4回(春・秋は小学生向け、夏・冬は中学生向け)の病気の子どものかょうだいのためのワークショップ「きょうだいの日」の開催、月2回(第2・4火曜日)大阪市立総合医療センターに於いて面会中の保護者を廊下で待つきょうだいとあそぶ病院活動を実施。活動で培った経験やノウハウを伝え、きょうだい支援のネットワークをひろげるための講演会や研修会などを実施している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>病気や障がいをもつ子どものかょうだいたちは、不安や孤立感、自責感などさまざまなプレッシャーを感じながら育っている。不登校や心身症になるきょうだいや、子ども時代の経験が人格形成に影響を及ぼし、大人になっても生きづらさを抱えるきょうだいも多い。</p> <p>本事業では、その生きづらさが社会課題として認識され、社会の意識を変えるための啓発活動を行うことを内容としている。</p> <p>具体的には、2019年の「シブリングデー」(4月10日)にあわせて、啓発コースターをイベントで配布したり、趣旨に賛同いただいた店舗や企業等で使用してもらおう。受け取った人には病気や障がいをもつ子どものかょうだいたちの頑張り思いを馳せ、きょうだいたち自身には応援する人たちの存在を感じてもらおうきっかけとなり孤立感の軽減につなげていく。</p>
<p>講評</p>	<p>当事業は、病気や障がいを持つ子どもたちのきょうだいの不安や孤立感、自責感などに着目した事業である。審査委員会では、その着目の斬新さに注目し、きょうだい支援への理解からチャリティーにつなげていく展望も含めて、企画の「先進性」や「社会性」「効果と発展性」「新規チャレンジ性」を高く評価した。</p> <p>本アワードの助成が、支援の広がりとなり、全国的なチャリティーイベントとして定着し、きょうだいの取り巻く環境が優しく生きやすい社会につながっていくことを大いに期待したい。</p>

■ びわこ☆1・2・3 キャンプ実行委員会（滋賀）／30万円

「びわこ☆1・2・3 キャンプ in 2018 夏」

<p>団体概要</p>	<p>2011年3月11日の東日本大震災に伴う福島第一原発事故により放出された放射能の影響で、安心して自然と触れ合うことができない福島の子どもたちを思いっきり屋外で遊ばせたいとの思いで、春休み・夏休みを利用した施設滞在型のキャンプを実施するため、2012年に設立した団体。</p> <p>主な活動は、滋賀県高島市や大津市にて、春休み（10日間）・夏休み（1ヶ月）に、平均40名の子どもたち・スタッフ・ボランティアが共同生活をしながら、自然体験を中心とした野外活動を行っている。</p>
<p>事業概要</p>	<p>参加対象の子どもたちが暮らす地域は、原発事故の影響でコミュニティーが崩壊し、今なお避難先や仮設住宅で暮らす方も多く、放射能汚染により自由に自然の中で遊べないところがある。</p> <p>本事業では、放射能汚染のないところでの長期保養による心身の解放、無農薬中心の食材での安全な食事による免疫力向上、共同生活による自立などを目的とした保養キャンプの実施を内容としている。</p> <p>具体的には、夏キャンプでは40名の子どもたちとスタッフ、ボランティアの総勢60名が施設滞在型の保養キャンプで1ヶ月間の共同生活を行い、琵琶湖遊泳・サイクリング・野草摘み・山歩き・飯盒炊飯・川遊び・プールなどの野外活動や工作・お菓子作り、コンサートなどの芸術鑑賞とDV予防、食育や防災のお話とワークショップへの参加、琵琶湖博物館、平和祈念館などの見学、地域の夏祭りへの参加などに取組み、キャンプの後半には子どもたち自身が企画・運営をする子ども祭りを実施する。</p>
<p>講評</p>	<p>当事業は、保養キャンプを継続することにより、東日本大震災や原発事故を風化させないこと、また被災地への関心を高め、被災者支援の継続を狙いとしている事業である。</p> <p>事業実施にあたって、開催地の自治体や教育委員会、社会福祉協議会の後援、食材や宿泊施設、寝具などの調達準備にあたっての民間会社や学校との連携、さらに、地元自治会や医療機関の協力など、さまざまな団体との連携、100名ものボランティアによるプログラムの実施となっている。審査委員会では、当事業の継続した実施に対して、企画の「社会性」や「共感と市民参加」、資源活用を高く評価した。</p> <p>本アワードの助成が、被災地・被災者への支援の継続と広がりにつながっていくことを大いに期待したい。</p>